

EurekaXIII

六年制通信 No.23 令和7年10月24日(金)号

釣瓶 (つるべ)

ノーベル賞、やりましたね！暗いニュースの多い中、久々に明るい知らせが舞い込んだ感じです。生理学・医学賞に大阪大学の坂口志文特任教授、化学賞に京都大学の北川進特別教授。またまた関西圏からの受賞者、のような気がするのは私だけでしょうか。嬉しいことに、新聞報道によるとお二人とも74歳とのことですから、中高の勉強を紙と鉛筆、当然紙の教科書に紙の辞書で行っていたはずですよ。そうやって基礎学力を十分に養った人が長じてデジタルなどの便利なツールに出会うのが理想なのではないか、私はそう思うのですがどうでしょう。

科学者の偉大な業績の、その中身は私にはさっぱりわかりませんが、いつも思い出すのは数学者の岡潔の言葉です。岡の半生は何年か前に佐々木蔵之介の主演でドラマになりましたから観た人がいるかもしれませんね。超の字のつく変人ですから、私生活におけるそういうエピソードばかりが目立ってしまうのですが、彼は一貫して情緒を育むことの大切さを力説しています。これも素人考えでしょうが、数学はひたすら論理で形成されているのであって、情緒の世界とはもともと無縁だと思いませんか、皆さんは。岡は特に自然の美しさを美しいと感じる心がないとダメだと言っています。岡潔が言うのですからきっとそうなのでしょうね、と私は思うしかありません。しかし同じ数学者の藤原正彦は岡の説を支持し、天才が生まれる土壌として「美しい自然」があるはずだと言っています。しかも、それを証明するためにインドが生んだ天才ラマヌジャンの故郷を訪ね、美しい自然に囲まれていることを発見しています。

日本人は古来自然を愛でる民族だと思います。宣長などは大和心とは何かと問われると、朝日に匂ふ(＝色が染まる)山桜の花だと答えているくらいですからね。私たちは昔から和歌や俳句など、究極に削り取られた言葉の数の中に自然の素晴らしさを詠みこんできました。十七音まで削り取られたのが俳句です。先日研修旅行で松山に行ってきましたが、どこにでも俳句を投稿するポストがあって、この恐らく世界で一番短い文学が今に生きていることを実感しました。三重県が生んだ松尾芭蕉、それだけでも私たち三重県人は誇らしいですが、私たちのよく知る彼の俳句は日常誰もが目にする自然の一コマを切り取ったものが多いのではないのでしょうか。詳しくないので大きなことは言えませんが、ぱっと思いつくものでも…。

古池や蛙飛び込む水の音 五月雨を集めてはやし最上川

閑さや岩にしみ入る蝉の声 初時雨猿も小蓑を欲しげなり などなど

芭蕉ではないけれど、目には青葉山不如帰初鰹 これも自然の一コマでしょう。

私は次の俳句が一番好きです。朝顔に釣瓶とられてもらひ水、作者は加賀の千代女だと校長室で勉強している 6 年生たちが調べてくれました。この句をいつ知ったのか全く記憶にないのですが、初めて耳にしたときになんて美しい俳句かと感動したのをよく覚えています。これほど自然の計らいとそれを見つめる日本人のやさしい情感を表しているものはないのではないか、そう思えます。蛙が池に飛び込む様子も蟬の声があたかも岩にしみ入るように降り注ぐさまも、初時雨に震える猿の姿も日本人ならはっきり目に浮かぶと思います。しかし、「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」を耳にすると言葉にされていない、水を汲みにやってきた人物、その人が朝顔の蔓が釣瓶に絡んでいるのを見て微笑んでいる姿、朝顔をそのままにして手間をかけてでも他所の家へもらい水に行こうとするやさしさ、それらが一瞬で浮かんできませんか。そしてその人物は、私には、水を汲んでくるように言いつけられた女の子のように思えます。君たちには釣瓶を奪った朝顔に微笑む少女が見えますか。

私が小学生の時、木造校舎で井戸水も出ました。田舎に行くとそれこそ釣瓶をカラカラと落として水を汲んだ経験があります。そんな釣瓶が目の前から姿を消してしまいました。もう君たちは見たことも触れたこともないでしょうね。あの縄のごつごつした感じ、夏でもかなり冷たい水、そういう実体験がなくなると同時に千代女の俳句も理解されなくなるのでしょうか。確かに、井戸も釣瓶も見ることがなくなった現代人にこの俳句の持つ情緒が理解できるとは思えないですものね。せめて、できるだけ美しい自然を残し、それらを感じ得る情緒だけは養いたいものですね。

今週のおすすめ

・伊与原新 『月まで三キロ』（新潮文庫）

以前 NHK で伊与原さん原作のドラマ「宙わたる教室」を放送していました。定時制に通う年齢もバラバラの生徒たちが科学部に入って活躍する話で、私は毎週楽しく観ていました。かなり専門的な知識を持った方だと思っていたが、伊与原さんは地球惑星科学がご専門の学者さんなのですね。納得です。

『月まで三キロ』は新田次郎文学賞を受賞した短編集です。どれも面白く読みました。どれも少し不思議な、しかし十分にあり得そうな日常の断片を切り取った物語ですが、私は中でも「星六花」と「山を刻む」が好きですね。

「星六花」は私よりむしろ若い君たちの方が好みそうな物語ですね、きっと。六花（りっか）とは雪のことです。美しい言葉だと思いませんか。この短編を読んで寺田寅彦を手にとってくれると嬉しいです。雪と言えば寺田寅彦ですからね、昔から。岩波新書にまだ出ていると思いますよ。「山を刻む」は私くらいの年齢の方が物語が恐ろしいくらい具体的に染み込んでくるので、いろいろと考えさせられます。若い日に追いかけた夢を人はどのように手放していくのでしょうか。いや、はたして本当に手放したまま生きていけるのでしょうか。そのことも考えさせられました。破綻のないしっかりした文体で、読みやすいので諸君にお勧めします。

BGM は 財津和夫 の サバテンの花 でした…。